両界曼荼羅諸尊を安置する仏堂とその空間

—仏堂における両界曼荼羅空間の展開に関する研究 その1—

THE ARCHITECTURE AND THE SPACE OF GARBADHATU
AND VAJRASHATU MANDALAS—A historical study on the development of three-dimensional representation of Garbadhatu
and Vajradhatu Mandalas in Buddhist hall Part 1—

富島義幸*

Yoshiyuki TOMISHIMA

In the early Heian period, Kukai introduced organized esoteric Buddhism to Japan, and formulated a plan to make three-dimensional Garbadhatu and Vajradhatu Mandalas in stupas and Buddhist halls. By this time in the Shingon Buddhist sect, the outlook on the buddhist world of Garbadhatu and Vajradhatu Mandalas had permeated as an idea of architectural space. Though the Tendai Buddhist sect also adopted esoteric Buddhism, Garbadhatu and Vajradhatu Mandalas as an idea of architectural space had only a small influence there.

In Buddhist halls we can observe more varied compositions of Garbadhatu and Vajradhatu Mandalas than in stupas. And under the rule of the retired Emperor Shirakawa, Garbadhatu and Vajradhatu Mandalas had been very influential upon the space of Buddhist architecture of the Imperial family and the nobility.

Keywords: Middle Ages, Buddhist Hall, Esoteric Buddhism, Garbadhatu and Vajradhatu Mandalas

中世, 仏堂, 密教, 両界曼荼羅

序

平安時代初頭、新たにもたらされた密教は急速に浸透し、その影響は建築空間にも広汎におよんだ。密教教義の根本的構造を示す両界曼荼羅は、空海により建築空間として表現することが構想され、東寺講堂・高野山大塔は実現されたその代表的事例である。

すでに拙稿において、これら両界曼荼羅の理念に基づいて構成された空間を「両界曼荼羅空間」と呼び、平安時代の層塔におけるその多様な展開を論じている¹。これに続き本研究では、主として平安時代に、仏堂において両界曼荼羅空間が遂げた展開の一端を明かにすることを目的とする。ただし、平安時代における両界曼荼羅空間の展開が継承されたと判断され、かつ重要と考えられる事例は、鎌倉時代初期に属するものであっても、必要に応じて取り上げていくことにする。

塔の空間を題材とした拙稿では、顕密体制下における両界曼荼羅の再構築という点に注目したが、これに加え本研究では両界曼荼羅空間が大日如来を中尊とする塔・仏堂から、とくに阿弥陀堂へと展開する過程を追ひ、両界曼荼羅の理念が建築空間の構成に与えた影響の重要性を、社会的背景をふまえて、浮き彫りにすることを最大の目的としている。

密教教義の根本をなす両界曼荼羅図は、大日如来を中心に多く

の諸尊を組織的に配する密教の世界観を、平面的に図像化したものであり、建築空間を構成するうえで直接の理念となる可能性を孕む。密教導入後の建築空間の構成理念に、両界曼荼羅図およびその仏教的世界観が与えた影響はきわめて大きかったと考えられ、その実態を明かにすることは建築史学の重要な課題といえよう。

まず本稿において、大日如来を中尊とする仏堂における両界曼荼羅空間の展開を考察し、その構成の特質を明らかにする。次稿で本稿の考察をふまえ、阿弥陀如来を中尊とする仏堂の空間構成を検討し、両界曼荼羅の理念が如何に反映されたのかを検討する。

なお、本研究で取り上げる事例には、建築史学をはじめ、美術史学等ですでに紹介されたものが多い。しかし、従来の研究では、彫刻・絵画・建築など建築空間を構成する要素を、個別にわけて検討することが中心となり、本稿のように両界曼荼羅を実体化した空間として総体的に捉え、その展開を論じたものはない²。

1 建築空間の構成要素としての彫刻と絵画

仏教の建築空間は本尊となる仏像彫刻、建築内部に描かれた仏画、そのほか経典・舍利など多様な要素によって構成される。両界曼荼羅空間は、彫刻として安置された諸尊と、柱絵あるは壁画として内部に描かれた諸尊とによって構成されるが、塔の空間に

* 金沢工業大学工学部居住環境学科 講師・博士(工学)

Assistant Prof., Division of Architecture, Kanazawa Institute of Technology,
Dr. Eng.

はわずかに異なる2つの構成が認められた。ここでは塔の両界曼茶羅空間を題材として、2通りの空間構成を具体的事例で示し³、彫刻と絵画の関係が如何にあったかを検討したい。

1.1 円勝寺三重塔と永仁再建東寺五重塔の空間構成

大治3年(1128)待賢門院の御願寺として供養された円勝寺では、寺院供養に先立つ大治元年に三重塔が建立され、等身金色の大日如来を安置し、四天柱に金剛界三十六尊、扉に十二天を描いた⁴。この三重塔では、大日如来を仏像彫刻として安置していたので、四天柱に描かれた三十六尊は、金剛界三十七尊から大日如来を除いたものと考えられる。つまり円勝寺三重塔では、彫刻の大日如来と四天柱に描かれた三十六尊を一体にして、金剛界曼茶羅を建築空間として実体化していたと考えられる。

永仁年間(1293~1299)に再建された東寺五重塔初重内部の空間構成は、『東宝記』⁵第二仏宝中「塔婆」の記事・指図により知ることができる。須弥壇上に金剛界四仏を彫刻として安置し、四天柱のうち西の2本には金剛界四仏と十六大菩薩、四攝菩薩像を、東の2本には胎蔵界四仏、四菩薩、諸院の中心となる諸尊を描いていた。須弥壇上の金剛界四仏で金剛界曼茶羅を、四天柱の東西2本ずつに胎蔵・金剛両界の諸尊を描くことで両界曼茶羅を形成していた。彫刻・絵画いずれでも大日如来を表現しないが、これは心柱あるいは塔全体を大日如来とみなしたためと考えられる⁶。永仁再建東寺五重塔の両界曼茶羅空間は、彫刻からなる金剛界曼茶羅に四天柱の柱絵からなる両界曼茶羅を重ねて構成されていた。

1.2 空間構成要素としての彫刻・絵画の意義

塔の両界曼茶羅空間は、先のいずれの場合も彫刻・絵画の尊像で構成され、彫刻・絵画どちらの尊像も密教理念を建築空間として実体化するという宗教的意義を有していたといえる。これらの尊像は主として美術史学の研究対象となってきたが、本研究のように建築空間の構成要素として、一体に考察する研究は充分になされてこなかった。とくに、仏教建築に柱絵・壁画として表現された尊像は、建築の荘厳として一括され、その宗教的意義が具体的に検討されることはほとんどなかった⁷。彫刻と絵画の尊像を一体に考察する方法の有効性を示すためにも、両者が両界曼茶羅空間を構成するうえでつ意義の関係を確認しておく必要がある。

待賢門院御願の法金剛院三重塔造営における安置仏の計画は、この問題を考えるうえで興味深い。顕證本『仁和寺諸院家記』⁸、『吉記』承安4年(1174)2月17日の記事によれば、この塔では初重に心柱が通らず⁹、大日如来を中心とする両界曼茶羅の五仏を安置し、四天柱に両界曼茶羅諸尊を描いていた。

『長秋記』には、待賢門院御願の塔について、いくつかの記事がみられる¹⁰。そのうち、長承3年(1134)12月15日の条には、

仁和寺北斗堂 御仏始、〈仏師賢門、〉

法金剛院御塔御仏雖可始、五仏四方四仏事未定間延引了、仏師院覚、

(引用部分の〈〉内は細註。以下これにならう。)

とあるが、この「仁和寺北斗堂」と「御塔」は、保延2年(1136)10月15日、待賢門院によって建立・供養された法金剛院北斗曼茶羅堂と三重塔¹¹であったと考えられる。このとき北斗曼茶羅堂の仏像が造り始められたのに対し、塔では仏師が院覚に決まりながら、安置仏が決まっていなかった。

続いて、同記保延元年(1135)5月1日の条には、

参仕仁和寺女院、依召参御前、多被仰雜事、(中略)新造御塔大日四体被停之由、承之如何、仰云、宮示給云、依塔狭少也、於大日可図柱絵者云々、

とある。「仁和寺女院」すなわち待賢門院の御前に参仕した源師時が雑事を仰せられるなか、新造御塔のことがあり、この塔に安置する大日如来4体の造立が止められた。「宮」すなわち覚法法親王の示すところによれば、これは塔内が狭いためであり、大日如来4体は柱絵として描くべきというのである。

このように、法金剛院三重塔では、4体の大日如来と四方四仏各1体の計8体を安置する¹²計画が、塔内が狭いために、中尊である大日如来を柱絵とする計画に変更された。諸尊を彫刻として表現するか、柱絵・壁画で表現するかは建築的な制約にも影響されたのである。大日如来が彫刻で安置されようと、柱絵として描いて安置されようと、両界曼茶羅空間を構成するという理念そのものは継承されていたのであるから、彫刻の大日如来と柱絵の大日如来には宗教的意義の差はなかったということになる。

同様のことは、円融寺五重塔に関して、大日如来4体を図絵し、四仏を彫刻で安置したとする『扶桑略記』の記事¹³と、逆に、大日如来4体を彫刻として安置し、四仏を図絵したとする顕證本『仁和寺諸院家記』の記事¹⁴との相違に端的にあらわれている。

このように塔内に安置された彫刻の尊像と、柱絵として描かれた尊像は、両界曼茶羅空間を構成するうえで一体となり、対等の宗教的意義を持つ場合までもが認められる。彫刻とともに仏教建築に描かれた諸尊の宗教的意義は認められて然るべきであり、両者を一体として考察する方法が、建築空間の宗教的意義を明らかにするうえで有効かつ必要と考えられるのである。

2 大日如来を中尊とする仏堂の両界曼茶羅空間

両界曼茶羅諸尊を安置する最初期の仏堂として、東寺講堂がよく知られる。その後は、塔と同じく仏堂でも胎蔵界・金剛界あるいは両界曼茶羅を建築空間として体現すること意図した事例が数多くみられる。平安時代から鎌倉時代初頭のこうした仏堂、あるいは大日如来を中尊とする仏堂をとりあげたのが【表①】である。

これらの仏堂には延暦寺講堂をはじめ、大日如来を安置しながらも、五仏など複数の尊像からなる両界曼茶羅の組織的構成を示さない事例がある。また、大日如来一体のみを安置する仏堂は、表中の金剛寺本堂等の他にも枚挙に暇がない。ここでは【表①】のうち、とくに両界曼茶羅空間の展開を論じるうえで、詳細に考察することが必要な事例を中心に検討する。

なお、天台系権門寺院については、現在のところ『叡岳要記』・『山門堂舎記』・『三塔諸寺縁起』等の限定された記述によるしかなく、また安祥寺・法成寺・四円寺・六勝寺の建築の安置仏については詳しい先行研究があり¹⁵、これらの仏堂についての論考は記さず、【表①】に委ねることにする。

2.1 東寺講堂

空海によって造立が開始された東寺講堂では、金剛界五仏を中心に、その左右に五大明王・五菩薩を安置する¹⁶。

『東宝記』第一仏宝上「講堂」には、

行宴法眼依御室仰、講堂柱絵両界尊像可令図之、邇代雖注進之、遂以不行事、可謂遺憾矣、

建築名	教団	規模・形式	建立年代	安置仏	内部荘嚴	その他	典故	
延暦寺講堂	天台	三間四面(延暦寺様) (天禄3に九間堂)	大長1以降 (9世紀初期 ～中期)	824以降 胎藏大毘盧遮那 (胎藏界大日如来) 弥勒・十一面観音			山門堂舎記・散所要記 ・三塔諸寺縁起	
東寺講堂	真言	七間四面	承和6.6.16	839 金剛界五仏 五菩薩・五忿怒・六天	百仏百菩薩百羅漢		※	
			計画案は 建久8以前	1197以前 同上	東母屋柱:胎藏界諸尊 西母屋柱:金剛界諸尊 母屋柱:古材に継あり		※	
東寺灌頂院	真言	五間四面	承和10頃	843頃	母屋柱:古材に継あり	南界曼荼羅 同上	※	
			計画案は 建久8以前	1197以前 同上	東母屋柱:胎藏界諸尊 西母屋柱:金剛界諸尊		※	
神護寺五仏堂	真言	三間四面	承平1以前	931以前	等身金剛界五仏		※	
神護寺講堂	真言	三間四面	承平1以前	931以前	丈六六日如来 半丈六金剛薩摩・不動明王		※	
安祥寺礼仏堂	真言	長五丈	9世紀半ば		五尊如来		安祥寺伽藍縁起寄附帳	
醍醐寺東院	真言	三間四面・東礼堂	9世紀半ば		半丈六六日如来	仏後壁・五大尊・十六天	醍醐雜事記・伝説集	
神林寺仏堂	真言		貞観5.9.6	863	金剛界五仏	南院諸尊	※	
貴観寺金剛界堂	真言		貞観16.3.23	874	金剛界三十七尊 天像等計七十余体		※	
直観寺胎藏界堂	真言		貞観16.3.23	874	胎藏界諸尊		※	
園城寺講堂	天台	二階	貞観17	875	大日如来(胎藏界大日如来?) 釈迦・阿弥陀		園城寺伝記・寺門伝記 補録	
金剛峯寺真言堂	真言	一間四面	仁和3	887	大日如来 四天王	真言祖師像・淨宗六祖・行基・鑑真・ 十二天・五大尊	金剛峯寺建立修行縁 起	
仁和寺円堂院	真言	八角円堂	延喜4.3.26	904	金剛金剛界三十七尊(三摩耶形) 外院など		※	
比叡山恵心院	天台	五間四面	永観1.11.27	983	大日如来 六観音・文殊聖僧像		山門堂舎記・三塔諸寺 縁起・散所要記 ・三塔諸寺縁起	
比叡山静慮院	天台	五間堂	10世紀末～ 11世紀初頭		如意輪・不動・梵天・帝釈・四天王		※	
法成寺金堂		七間四面カ?	治安2.7.14	1022	三丈二尺大日如来 二大釈迦・聖師・文殊・弥勒・六天	柱:南界曼荼羅 扉:釈迦八相成道	不知記(諸寺供養願記)	
円教寺御願堂		礼堂付	長元7.10.17	1034	丈六六日如来 聖師・釈迦・六天		左経記	
比叡山五仏院	天台		10世紀半ば		丈六阿弥陀 三尺金剛界五仏		山門堂舎記・三塔諸寺 縁起	
法成寺講堂		七間四面	永承5.3.15	1050	三丈二尺大日如来 丈六釈迦・聖師・不空・観音・ 延命・大威徳・不動		春記	
平等院本堂		五間四面	永承7.3.28	1052	大日如来 聖師・釈迦・不動・大威徳		伊呂波字類抄・ 門巻記	
円宗寺金堂			延久2.12.16	1070	三丈大日如来 丈六釈迦・一字金輪・丈六六天		扶桑略記	
多武峰南院堂	天台	一間四面前庭	永保1	1074	三丈大日如来		多武峰略記	
比叡山金剛祥院	天台	三間堂	永保3.6.13	1076	八尺大日如来 如意輪・延命菩薩(大安楽不空尊) 如意輪・延命菩薩(大安楽不空尊)		山門堂舎記・散所要記 ・江都骨納言願文集 承暦元年十二月法勝 寺供養記	
法勝寺金堂		七間四面	承暦1.12.18	1077	三丈二尺大日如来・三丈多宝・ 開敷臺・無量壽・天鼓萬音・六天	柱:南界曼荼羅	仁和寺諸院家記 ・寺供養記	
仁和寺大教院	真言	重閣	永保3.2.27	1083	六尺金剛界五仏		仁和寺諸院家記 ・寺供養記	
醍醐寺円光院	真言	一間四面	応永2.8.29	1085	金剛南界曼荼羅	中宮賢子・儒秀門院・一品宮・ 皇太后宮の遺骨	醍醐雜事記	
円勝寺金堂			大治3.3.13	1128	三丈大日如来・丈六胎藏界四仏	柱:南界図	円勝寺供養願	
高野山大伝法院	真言	一間四面 宝形造二階三間四面	大治5.4.8	1130	丈六尊勝仏頂		※	
			長承1.10.20	1132	二丈一尺大日如来 二丈金剛薩摩・同尊勝仏頂	仏後壁中央:金剛界五仏 仏後壁左:五菩薩・仏後壁右:五大尊 内陣西柱:金剛界五仏・菩薩・五大尊他 内陣東柱:胎藏五仏・般若菩薩四行菩薩他 自余十二柱:三十七尊字印形・仏眼・金輪 外金剛部二十天尊 母屋東柱二本:金剛界諸尊 仏後壁:法華経五輪・寿量等品 仏後東西障子:梵天・帝釈・四天王 金剛界三十六尊・胎藏界八葉八尊 仏眼仏母・金剛薩摩・般若菩薩 八大菩薩・八大明王・十二天・四天王	南界曼荼羅 (南界に後壁・壁面あり)	※
仁和寺南院釈迦堂	真言	一間四面二階堂	保延1.1.27	1135	丈六釈迦		仁和寺諸院家記・ 長秋記	
高野山覺皇院	真言	八角二階一間四面	久安5.11.24	1149	丈六六日如来	南界曼荼羅	※	
高野山遍照院	真言	一間四面	保元3.9.29	1158	大日如来	大日胎内に中山忠親の母遺骨	山権記	
中尊寺南院堂	華嚴	正面十一間	建久6再建	1189以前	普賢色木像南院諸尊		※	
東大寺大仏殿	真言	奥行七間	(建久7以降)	(1196以降)	(南界大日如来)		東大寺経要録 東大寺具書	
金剛寺本堂	真言	五間四面	建保3以前	1215以前	丈六金剛界大日如来	中尊の南面に南界堂を設ける 南界曼荼羅・真言八祖像	葛城門院序下文	

【表①】大日如來を中尊とする仏堂

注: 典故のうち※は本稿での考察による。また、ゴシック文字は南界曼荼羅諸尊をあらわす。

と、「御室」すなわち守覚法親王から行宴に、講堂の柱に南界諸尊を描く仰せがあったが実現しなかったという。行宴は仁和寺菩提院の住侶で、文治3年(1187)、北院において守覚法親王より灌頂を受けている¹⁷⁾。建久年間(1190～98)の文覚を中心とした東寺復興に関り、『東宝記』にもしばしば現れる。

東寺講堂で計画された柱絵の内容は、中野玄三氏によって紹介された観智院金剛蔵の聖教である「東寺金堂講堂灌頂院本尊座位」¹⁸⁾(以下「本尊座位」とする)により知ることができる。この聖教は、観智院賢宝が応安3年(1370)蔵昌の本を写したもので、講堂の条の末尾に「已上菩提院記」、その右に朱で「行宴法眼」と記されている。これが『東宝記』に記された行宴の計画であったと考えられ、この計画は文覚による講堂の修造の一環に位置付けられよう。以下に、講堂の柱絵に関する記述の全文を引用する。

東寺講堂柱絵事

柱惣数十八本 ① 《正面以東九本、可図胎藏界尊、正面以西九本、可図金剛界尊、》

仏菩薩像〈三昧耶身〉、外部天等〈羯磨身〉

南界各八十一尊 《毎柱仏菩薩九尊定外部天等此外也》

金剛界

卅七尊 ② 賢劫十六尊

已上根本会

四大明王〈依神日記等意、加四大明王、〉

四印会五尊 理趣会十七尊

已上十七十九尊闕位二尊、可図賢劫菩薩、

或百八尊〈毎柱仏菩薩十二尊定〉

卅七尊 ③ 五仏頂 賢劫十六尊 十波羅蜜 《依秘藏記等意、加五仏頂并十波羅蜜》

四大明王 四印会五尊 理趣会十七尊

已上九十四尊闕位十四尊、可図賢劫菩薩

胎藏界

現図諸尊其数已多略之、可取八十一尊乃至百八尊

已上菩提院記

東寺講堂柱絵事

真乘院僧正《覺教》語云、百仏百菩薩百羅漢像図之、若時參詣之時、親見之〈云々、〉④

(中略)

已上菩提院記

(引用部分の《》内は割注、()内は引用者註、下線・番号は引用者による。以下これにならう。)

まず、かつて東寺講堂には「百仏百菩薩百羅漢像」が描かれて

いたという覚教の言葉(④)があげられるが、これらの尊像は『仁王般若波羅蜜經』に基づく諸尊と考えられている¹⁹。とすれば、この計画で、講堂柱絵の内容が変更されたことになる。

今回の計画として、総数 18 本の柱に両界曼荼羅諸尊を描くことが示されるが(①)、東寺講堂は七間四面、須弥壇を取り囲む母屋柱 18 本であり、これら母屋柱に柱絵を描く計画であったと考えられる。母屋の柱を、中央柱間を境として東西に分け、東に胎藏界諸尊、西に金剛界諸尊の 81 尊もしくは 108 尊を選んで描き、両界曼荼羅を構成しようとした意図を読み取ることができる。金剛界は、まず三十七尊が選ばれていおり(②③)、このうちには大日如来をはじめとする金剛界五仏も含まれていたはずである。

東寺講堂では、須弥壇中央に彫刻として金剛界五仏を安置し、中尊大日如来の宝冠に胎藏界五仏、光背には金剛界三十七尊を現し、両界曼荼羅を具現する構成が認められる²⁰。建久年間の再興では、彫刻の五仏からなる金剛界曼荼羅に、さらに柱絵の両界曼荼羅を重ねる計画であった。この重層的な構成は『東宝記』に示された永仁再建東寺五重塔の構成と共通しており、ひいては胎藏界五仏を彫刻として安置し、しかも柱に両界曼荼羅諸尊を描いた法勝寺金堂と相通ずる構成であった可能性も考えられる。

2.2 東寺灌頂院

東寺灌頂院(灌頂堂)は、恒常的に仏像彫刻の本尊を安置することはなく、法会に際して両界曼荼羅図を鋪設する仏堂である。

灌頂院は、伝法灌頂・結縁灌頂が始められた承和 10 年(843)までに建立され、延久元年(1069)に破損、建久 2 年(1191)に後白河法皇の御願で大修理を受け、建長 4 年(1252)焼亡、同年に再建された²¹。現在の建築は寛永 11 年(1634)の再建で、その内部では背面と両側面に真言八祖像、正面東西両脇の柱間に、胎藏界・金剛界の大日如来を表す種子が描かれている。母屋柱に柱絵はない。

『東宝記』第二仏法中「灌頂院」には、灌頂堂についての記事、指図がのせられるが、『東宝記』は杲宝の編纂であり、建長 4 年の焼失後に再建された灌頂堂について記されたものである。この灌頂堂にも、現在の灌頂堂と同じく、南壁に胎藏界・金剛界の大日如来を示す種子が描かれていた。

柱絵について、『東宝記』では、

中古荒廃之刻、柱絵等零落之間、建久之初、新有沙汰《守覚法親王被仰談行宴法眼、》被図之、

と、灌頂院の柱絵が零落しており、建久年間の初頭に守覚法親王の仰せにより行宴が新たに図したという。この記述からは、行宴により柱絵が実際に描かれたように読み取れる。同記では続けて、

其後建長四年炎上之時、於列祖図絵壁板者取出畢、當時柱絵定任建久図歟《建久図在別、》

と、建長焼失以前の柱絵を示した図の存在が示唆される。また、至建久二年、依 後白河法皇御願、及当寺諸堂修理之朝議、(中略)其内灌頂堂為斤沙汰被修造之、大略如新造、母屋柱十二本内、古柱只二本也、其余新被立之、即被遂供養之儀、委細在別記如次上注《両界曼荼羅様》」

(「」は引用者による。原本では「」内が墨書で抹消され、傍註に「在別記」と記される。)

ともあり、柱絵の内容として「両界曼荼羅」が抹消されている点に注意しておきたい。

「本尊座位」には、「東寺灌頂堂柱絵事」として、朱で「菩提院記」と加え、

依 法皇御願東寺諸堂有修理事、(中略)其内灌頂堂為斤沙汰修造之、大略如新造、而堂内母屋柱十二本内古柱残只二本也《有絵》、仍自院令申御室給、件柱絵図可注進給《云々》、

とある。すなわち建久 2 年(1191)の修理で灌頂堂は新造の如くされ、母屋柱 12 本のうち古柱は 2 本しか残っておらず、この古い柱に絵があった。さらに修理に際して、後白河法皇から御室への仰せにより柱絵を注進したという。

以上の記事とあわせると、後白河法皇の灌頂院修造御願による修理のとき、母屋柱の 12 本中 10 本を取り替え、残る古柱 2 本には柱絵があった。また、この修理に際して、後白河法皇の御願により新たな柱絵を注進し、これを示した図が存在したことになる。

「本尊座位」には、柱絵の具体的な尊名を記述した「東寺灌頂堂柱絵尊号」、「東寺灌頂堂柱絵後案」の 2 つが示される。以下に、柱絵からなる灌頂院の空間構成を、この史料を紹介した中野氏の論考に基づいて示すことにする。

「東寺灌頂堂柱絵尊号」には、胎藏界諸尊を北側 6 本の柱、金剛界諸尊を南側 6 本の柱に配する構成が示される。南側の柱に胎藏界諸尊、北側の柱に金剛界諸尊が入り込むなど、必ずしも整然としているわけではないが、大きく捉えるならば南北から両界曼荼羅空間をつくりだす構成とみなせる。醍醐寺五重塔では、初重内部に描かれた両界諸尊から、創建当初は南北で両界曼荼羅を構成していた²²。東寺灌頂院における南北の構成は、醍醐寺五重塔と共通しており、両者の関係があったか否かにも興味をもたれる。

次に「東寺灌頂堂柱絵後案」は、東側 6 本に胎藏界諸尊、西側 6 本に金剛界諸尊を配する、先の講堂柱絵計画の構成に通ずる案である。これは修法にさいして懸けられる両界曼荼羅、南壁の胎藏界・金剛界の大日如来を示す種子の構成とも一致する。

また、「本尊座位」に、

(灌頂院)同堂庇長押上板壁尊等、彩落像消大略如無、依重仰、(建久)同三年六月六日、参向彼堂、令注進図位了、〈私加取捨事等有之、〉兼又件壁板見尊位次第、両三間違乱有之、令糺直了、本壁板二ハ千手金剛藏両尊無之、令加之、

又連金両部眷属各十二尊、本壁板図之、而金部眷属或十二尊、或十一尊不同也、今付高雄図可被図之、仍止一尊了、

とあるように、庇長押上の壁板にも尊像が描かれ、剥落していた。今回の計画では、千手をはじめ金剛藏菩薩など両界曼荼羅諸尊を壁板に描くことになっていた。さらに、

母屋長押尊像当時奉図之通、仏菩薩尤可然候云々、

とあり、母屋長押にも「当時」すなわち建久頃に、仏・菩薩の尊像が描かれていたことがわかる。

『東宝記』の編纂は、建久に修理された灌頂院が焼失した後のことであり、建久の修理で柱絵が描かれていたとしても、それらはすでに失われていたはずである。同記で「如次上注《両界曼荼羅様》」なる部分が抹消され、「在別記」と記されたのは、「本尊座位」等の記録が残っていたためと考えられる。

従来、灌頂院では修法に際して両界曼荼羅が鋪設され、それ以外のときは何もない空間、いわば法会るとき以外は仏教理念によって荘厳されていない空間と捉えられてきた²³。東寺灌頂院では、

確かに本尊となる両界曼荼羅図が恒常的に安置されていたわけではない。また、建久の修理で柱絵の計画が実現したことを示す確かな史料も見いだせていない。しかし、後白河院政期に、母屋柱の柱絵により両界曼荼羅を構成する計画のあったことは、両界曼荼羅と建築空間の関係を考察するうえできわめて重要といえよう。

2.3 神護寺五仏堂

神護寺五仏堂については、『神護寺承平実録帳』²⁴に、

三間檜皮葺五仏堂一字〈四面庇、戸六具、〉

金色金剛界等身五仏

とあり、等身の金剛界五仏を安置した。神護寺では、金剛界五仏を安置する五仏堂、五大虚空像菩薩を安置する毘盧遮那宝塔、五大明王を安置する五大堂が建立され、東寺講堂の諸尊は伽藍へと展開した²⁵。しかし、神護寺は鎌倉時代初期には衰微し、その再興に尽力したのが文覚である。五仏堂は、この再興により講堂と改められ、『神護寺略記』に、

一、講堂

三間二階檜皮葺堂一字〈在四面庇、戸六具、〉

右承平実録帳云、三間檜皮葺五仏堂一字〈四面庇、戸^(六)具、〉今講堂是也、

奉安置

金色大日如来一軀〈丈六、光中化仏一尺六寸、卅一尊、〉

金色金剛薩埵菩薩像一軀〈半丈六、〉

彩色不動明王像一軀〈半丈六、〉

右文覚上人以仏師運慶法印奉写東寺講堂中尊三体、上人没後終其功畢、

とあるように、大日如来・金剛薩埵・不動明王を安置した。これらの三尊は文覚が仏師運慶をもって、東寺講堂の中尊三体を写したものであるという。文覚は東寺講堂の再興にも力を注いでおり、鎌倉時代再興の神護寺講堂の空間は、東寺講堂の空間構成理念に基づいて構成されたとみなされよう。

2.4 禅林寺仏堂

禅林寺は、『日本三代実録』貞観5年(863)9月6日の記事によれば、真紹の願いにより定額寺とされ、寺名を賜った。ここには、

奉為聖皇、造毘盧遮那仏及四方仏像、(中略)於河内国観心山寺、僅奉造、三年之間其功既畢、(中略)爰買故従五位下藤原朝臣閑雄東山家、即便為寺家、造立一堂、安置五仏、

とあり、観心寺において五仏を造り、新たに京の東山に仏堂を建て、五仏を移したという。「禅林寺式」(『平安遺文』156)には、

建立此伽藍、奉造金色五智如来之像、兼図絵両部諸尊之容、

とある。五智如来すなわち金剛界五仏を安置した建築は記されないが、「両部諸尊」の「容」を「図絵」したのであるから、『日本三代実録』に現れる五仏を安置した「一堂」に、両界曼荼羅諸尊を描いたとみられる。両界曼荼羅諸尊を描いた可能性が考えられる初期の仏堂として、貴重な事例といえる。

なお、観心寺には三間四面の如法堂があり、絵像の五大虚空蔵菩薩と五大明王を安置していた²⁶。これら諸尊に金剛界五仏を加えると東寺講堂の諸尊と一致するが、真紹による観心寺での金剛界五仏の造立に、東寺講堂の理念が影響した可能性も考えられる。

2.5 貞観寺金剛界堂・胎蔵界堂

『日本三代実録』貞観16年(874)3月23日の条には貞観寺供養

願文をのせ、「西堂、安置金剛界曼荼羅、(中略)東堂、安置胎蔵界曼荼羅」とあり、金剛界曼荼羅を安置する西堂と、胎蔵界曼荼羅を安置する東堂の存在が知られる。また、『吏部王記』承平元年(931)9月30日の条には、「次礼金剛界堂、次礼胎蔵界堂」とあり、これらはそれぞれ金剛界堂、胎蔵界堂とも呼ばれていた。

「故僧正法印大和尚位真雅伝記」²⁷には、

仁寿二年和尚発心始建貞観寺、其造作次第如右、先作金剛界堂、

即奉造卅七尊像并天等像総七十餘軀、是大皇太后御願也、(中

略)次作胎蔵堂、即奉造胎蔵曼荼羅仏像并天等像、是和尚私願也、

とある。すなわち皇太后明子の御願にかかる金剛界堂には、金剛界三十七尊像と天像等を合わせて70体余りを安置していたとあるので、彫塑群で金剛界曼荼羅空間を構成していたと考えられる。真雅の願にかかる胎蔵界堂についての詳細は不明であるが、胎蔵界曼荼羅から選ばれた尊像の彫塑群から、金剛界堂と同じく胎蔵界曼荼羅空間を構成していたと推測される。

2.6 仁和寺円堂

仁和寺円堂は、『仁和寺諸堂記』によれば昌泰2年(899)、宇多法皇により供養されたという²⁸。また翌昌泰3年には声明業年分度者一人が置かれた²⁹。『日本紀略』延喜4年(904)3月26日の条に「太上法皇於仁和寺円堂初設齋会」、同年閏3月21日の条に「法皇於仁和寺円堂、安置金剛界三十七尊、并外院天等」とあり、金剛界三十七尊などを安置したとされる。『本要記』では、

古徳記云、八角御堂《号円堂院、寛平御願、》安置金剛界三十七尊并外院三摩耶形、延喜三年三月廿六日、供養之、而改造之後、同五年三月廿六日《辛酉、八專、》又供養、法皇崩御後、式部卿宮改之、

天慶三年三月廿七日、供養、修復、

一条法眼記云、寛平法皇建立也、本者被造大内山、後渡仁和寺之内云々、所司三人置之、

(中略)

舞楽曼荼羅供記云、寛平法皇、円堂供養被始、此儀延喜四年三月廿六日辛酉、〈八專日、〉御導師益信僧正、請僧百口、

ともある。杉山信三氏の研究によれば、仁和寺円堂はまず昌泰2年に供養されたのであるが、延喜4年にあらためて南御室とともに造営された³⁰。したがって、金剛界三十七尊が安置されたのは延喜4年に改められた建築ということになる。

『本要記』には円堂の指図〔図①〕がのせられ、八角形平面の中央に「成身会三形」と記された正方形の須弥壇が描かれる。発掘調査によれば、八角円堂の基壇は一辺約10mもあった³¹。

安置仏については、『本要記』の記事のほか『本寺堂院記』に、

仁海僧正記云、仁和寺内異方、寛平法皇御念誦堂、八角堂内金剛界三昧耶金銅曼荼羅被安置也、

とあり、「仁和寺円堂供養願文」(『本朝文集』32)には、

仁和寺内地建八角一堂、奉安置金剛界卅七尊并外院天等三摩耶形、斯迦弟子、一生瞻仰之基、三時観念之所也、

ともある。仁和寺円堂では、金剛界三十七尊および外院諸天の金銅の三摩耶形を安置し、立体曼荼羅を構成していたのである。これら金剛界諸尊の像は、東京国立博物館蔵、那智山出土の金銅三昧耶形³²のような形態をとり、指図に描かれた方形の須弥壇に金剛界曼荼羅図成身会に基づき、配置されていたと考えられる³³。

【図①】『本要記』所収 仁和寺円堂指図
(奈良国立文化財研究所史料第三冊『仁和寺史料』寺誌編二より作成)

仁和寺円堂は『本寺堂院記』に「寛平法皇御念誦堂」、供養願文にも「三時観念之所」とある。昌泰3年には声明業年度者を置いており³⁴、宇多法皇の念誦堂としての性格をもっていた。

仁和寺はもともと天台密教の拠点であったが、宇多天皇が譲位し、昌泰2年(899)10月24日東寺一長者益信に戒を受け、当寺第一世となつてからは真言密教の拠点となり、益信・宇多法皇・寛空と続く広沢流を生み出した。円堂は、仁和寺が天台密教から真言密教へと転換するときに改められており、その供養導師が益信であったことから判断すると、改められた円堂は真言密教系の仏堂であった可能性が高いといえよう³⁵。

2.7 仁和寺大教院

仁和寺大教院は、顕證本『仁和寺諸院家記』に、

永保三年二月廿七日《癸酉、》被供養之、導師入道親王^(朱)、^{色費}其後終年序破損之間、北院御室令建^{今議院也}小堂給、

とある。永保3年(1083)性信法親王により供養され、その後荒廃したが、「北院御室」すなわち守覺法親王により小堂として再興された。この小堂も念誦堂とされる。また、「古徳記」を引いて、

大教院、〈阿闍梨三人、〉一品内親王聰子御願、安皆金色六尺毘盧遮那、等身阿閼・宝生・無量寿・不空成就等各一体、

永保三年二月廿七日《癸酉、》供養

ともある。「一品宮仁和寺御堂供養願文」³⁶には、

新造一寺、重軒飛閣之出層雲也、(中略)便奉造立皆金色六尺毘盧遮那如来、等身阿閼・宝生・無量寿、不空成就等如来像各一体、

とあり、「重軒飛閣」すなわち重閣であり、丈六毘盧遮那如来、等身金剛界四仏を安置し、金剛界曼荼羅空間を構成した。

2.8 高野山大伝法院

高野山伝法院は、大治5年(1130)4月8日、覚鑊により鳥羽上皇の御願寺として供養された³⁷。「伝法院供養願文」³⁸によれば、一間四面宝形造の伝法堂を建立し、丈六金色の尊勝仏頂一体、両界曼荼羅各一鋪等を安置した。この伝法院が手狭だったため、長承元年(1132)10月20日、大伝法院本堂を建立し、供養会には鳥羽上皇の御幸もあった。大伝法院については、醍醐寺蔵「大伝法院并堀内堂塔本尊仏具等事」³⁹に詳しい記事がある。本堂は、

一、本堂一字、宝形作二階三間四面《宝形宝鐸八口已上内外莊嚴金物皆金銀也、》正面中央間一丈六尺、脇間一丈五尺、庇一丈五尺、母屋柱十四本長三丈六尺口二尺八寸、自余准之、

とあるように、二階、三間四面の宝形の建築であった⁴⁰。宝形で母屋3間ならば母屋柱は12本のはずだが、14本とされる点が問題となる。この点は後に柱絵の構成とともに検討する。安置仏は、

一、大日如来像二丈一尺、(中略)緑光三十七尊等尊像、最上緑光安宝塔、

一、金剛薩埵像一体《二丈左右脇土》頭光身光三十七尊金銀種子付之、緑光同十七尊形像等付之、〈理趣經、〉

一、尊勝仏頂像一体《二丈左右脇土》頭光身光八大仏頂八大菩薩金剛種子付之、緑光八大仏頂八大菩薩付之、

とあり、二丈一尺大日如来、二丈金剛薩埵・尊勝仏頂であった⁴¹。

また、仏後壁について、

中尊後壁等身金剛界五仏、

左方後壁五菩薩〈等身、〉右方後壁五大尊〈等身、〉

とあり、金剛界五仏・五菩薩・五大尊を描いたといい、これらの諸尊は東寺講堂の安置仏と同じである⁴²。母屋柱の絵について、

母屋柱内陳西柱金剛界五仏并菩薩五大尊〈不動也、〉

同東柱胎藏五仏般若菩薩四行菩薩不動鳥瑟沙摩俱伽羅二童子等也、自余十二柱三十七尊字印形并仏眼金輪外金剛部二十天等也、

とあり、内陣の東側の柱に胎藏界五仏、西側の柱に金剛界五仏を描き、両界曼荼羅を構成していた。残る12本の柱にも「三十七尊」すなわち金剛界三十七尊の印形⁴³、その他の諸尊を描いた。これら12本の柱が方3間の母屋柱であり、14本から余る2本の母屋柱はそれぞれ胎藏界・金剛界五仏を描いた柱に当り、この2本は「内陣」すなわち母屋の内部に立てられていたと考えられる⁴⁴。

2.9 高野山覚皇院

『根来要書』⁴⁵第三には、覚皇院に関わる久安5年(1149)11月24日の「兼海覚皇院供養願文案」、仁平2年(1152)10月24日の「永範覚皇院供養願文案」、同年11月24日の「永範覚皇院供養願文案」が載せられ、いずれでも丈六の大日如来を安置する八角二階の一間四面堂を建立したとされる。これら3通のうち最初のものには「覚皇院供養願文〈寄進以前〉」とあり、これが建立供養のときのもの、続く2通が鳥羽上皇に献じて御願寺となったときのもので、同じ建築について書かれたものと考えられる。

建築・安置仏・内部荘嚴について「兼海覚皇院供養願文案」に、

奉建立八角二階宝形一間四面堂一字、

奉造立皆金色丈六大日如来像一体、

奉図絵金泥九幅両界曼荼羅各一鋪、

とあり、「永範覚皇院供養願文案」には、より詳細な記述がある。

建立八角二階一間四面檜皮葺堂一字、

其柱并梁、奉図絵金剛界阿閼仏等卅六尊、胎藏界宝幢仏等八葉八尊

①、仏眼仏母・金輪仏頂・金剛薩埵・般若菩薩・八大仏頂・八大菩薩・八大明王・十二天・四大天王并仕者一百廿体、阿字千体、

奉安置金色一丈六尺大日如来像一体、

奉図絵九幅胎藏金剛兩部大曼荼羅各一鋪、

これらの願文案によれば八角二階堂は檜皮葺で、丈六の大日如来を安置し、柱のみならず梁にまで両界諸尊、十二天等を描いた。ここで注意すべき、描かれた諸尊のうち金剛界は阿閼をはじめ三十六尊、胎藏界は中台八葉院の宝幢をはじめ八尊とされる(①)ことである。すなわち、この仏堂では柱絵としては両界いずれの大日如来も描かれていなかったと考えられ、『東宝記』に記され

た永仁再建東寺五重塔の柱絵と共通する。この五重塔では、心柱あるいは塔そのものを両界の大日如来とみなしていたとみられることは先に述べた。寛皇院仏堂の空間では、中尊として彫刻で安置された大日如来を、絵画で表現された両界諸尊の中尊、すなわち両界不二の大日如来とみなしていたと考えられる。

2.10 中尊寺両界堂

中尊寺では、『吾妻鏡』文治5年(1189)9月17日の「寺塔已下注文」に、「次両界堂、両部諸尊、皆為木像、皆金色也」とあるように、木像・金色の両界曼荼羅諸尊を安置する両界堂があった。貞観寺金剛界堂・仁和寺円堂という事例を勘案すれば、中尊寺両界堂も彫塑群から両界曼荼羅空間を構成していた可能性が高い⁴⁶。この両界堂が、貞観寺金剛界堂・胎蔵界堂のように2棟の仏堂からなるのか、1棟の仏堂で構成されるのかは明かでない。

3 仏堂の両界曼荼羅空間の特徴

ここで、以上の考察と【表①】をもとに、平安時代から鎌倉時代初期の仏堂における両界曼荼羅空間の特徴をまとめておきたい。

1. 塔の両界曼荼羅空間では、彫刻は大日如来、五仏・四仏を安置していた⁴⁷。仏堂ではこれらのうち四仏を除く形式に加え、貞観寺金剛界堂・仁和寺円堂・中尊寺両界堂のように、金剛界三十七尊やそれ以上の多くの尊像、時にはそれらの三昧耶形を安置する多様な構成が認められる。層塔でみられた大日如来と頭教の四仏からなる顕密融合の両界曼荼羅空間は認められない⁴⁸。
2. 東寺講堂の金剛界五仏・五菩薩・五忿怒は、神護寺・観心寺・安祥寺伽藍でも同じ諸尊が確認され⁴⁹、初期真言密教系伽藍の規範的理念の一つとなっていた可能性が考えられる。さらにこの構成は、院政期の高野山大伝法院、鎌倉再興の神護寺講堂に現れ、平安時代末期から鎌倉時代初期にも、再び真言系権門諸寺の規範的理念の一つになったと推測される⁵⁰。
3. 天台系権門寺院では、円仁が本格的に密教を導入した9世紀半ばに、総持院多宝塔で胎蔵界五仏を安置した⁵¹。しかし、仏堂では延暦寺・園城寺講堂、比叡山恵心院・静慮院・金剛寿院で大日如来を安置しながら、五仏を揃えるなど真言系権門諸寺の仏堂でみられるような、両界曼荼羅の理念に基づく諸尊の組織的構成は認められない⁵²。
4. 11世紀から12世紀に建立された天皇・貴族の寺院については、法成寺金堂・講堂、円宗寺金堂、平等院本堂では、中尊として大日如来を安置しながら、五仏を揃えない。これに対し、続く法勝寺・円勝寺金堂では胎蔵界五仏を揃えて安置しており、法勝寺金堂は空間構成理念として、五仏という両界曼荼羅の組織的構成が顕現する画期に位置する。
5. 内部に両界曼荼羅諸尊を描く建築は、真言系の創建東寺五重塔・創建高野山大塔まで遡ると考えられる⁵³。しかし、平安時代初期の仏堂では、真言系寺院でも金剛界五仏を安置した禅林寺仏堂で両界曼荼羅諸尊を描いた可能性が高いと判断される程度で、他は明確にならない。平安時代中期以降は、法成寺・法勝寺・円勝寺金堂という、天皇・貴族寺院の金堂で認められるようになる。とくに院政期には、高野山大伝法院・寛皇院や、東寺講堂・灌頂院の再興という真言系権門寺院と院の関りのなかで、仏堂内に両界諸尊を描く動きが顕著に認められる。

結

五仏を中心とする両界曼荼羅の組織的な構成が、建築空間の構成理念として強い影響をおよぼしたのは、天台系ではなく真言系の諸寺においてであった。また、鳥羽・後白河院政期には、真言密教系権門寺院において、院との関りのなかで、空間構成理念としての両界曼荼羅の影響が顕著に現れるようになる。

鳥羽・後白河院政期の直前である白河天皇・院の時代は、天皇御願寺の金堂に両界曼荼羅の理念が顕現するとともに、天皇・貴族寺院で両界曼荼羅空間を構成する塔が多数く建立されるようになる画期でもある⁵⁴。さらに金剛界五仏を安置する塔と胎蔵界五仏を安置する金堂で両界曼荼羅を構成する法勝寺伽藍、塔の再建で釈迦八相成道を安置する塔から2基の塔で両界曼荼羅を構成するようになった法成寺伽藍⁵⁵など、両界曼荼羅が伽藍の構成理念としても顕著に現れるようになる。これが阿弥陀堂にも両界曼荼羅諸尊が描かれるようになる時期と一致している点が注目される。

平等院鳳凰堂より後の阿弥陀堂では、柱絵等に両界曼荼羅諸尊が現れてくることが清水擴氏によって指摘されている⁵⁶。次稿では、阿弥陀堂をはじめ「浄土教建築」の系譜に位置付けられている建築の空間構成に、両界曼荼羅が与えた影響について考察する。

なお、毘盧遮那仏を両界大日如来ともみなす鎌倉再建東大寺大仏殿の空間⁵⁷は、両界曼荼羅空間の展開を考えるうえできわめて重要な事例である。この点は、本稿の考察、東大寺再建の背景、東大寺での真言密教の在り方をふまえ、別に論じることになしたい。

【註】

- ¹ 富島義幸「塔における両界曼荼羅空間の展開 ―平安時代の層塔を中心に―」（『仏教芸術』238、毎日新聞社、1998.5）。
- ² 仏教美術については、建築を中心に関連諸学の研究成果の集大成として『奈良六大寺大観』（岩波書店）・『大和古寺大観』（同上）・『平等院大観』（同上）等がある。しかし、これらの書物においては、建築・彫刻・絵画の詳細な検討が個別に行なわれており、各分野の詳細な検討を経たうえで、総体としての建築空間を如何に評価するかが示されることはほとんどなかった。
- ³ 円勝寺三重塔・永仁再建東寺五重塔の空間構成の詳細は前掲註1拙稿を参照。
- ⁴ 『永昌記』同年3月7日の条。
- ⁵ 『国宝東宝記原本影印』（東京美術、1982）。以下『東宝記』はこれによる。
- ⁶ 佐和隆研「東寺の歴史と美術」（『仏教芸術』92、毎日新聞社、1973）。
- ⁷ 仏教建築の壁面の宗教的意義が論じられた事例として、本稿の主題に即していうならば、醍醐寺五重塔があげられよう。この壁面については、塔の本尊とみなす見解（濱島正士「醍醐寺五重塔」〈『日本建築史基礎資料集成』11、中央公論美術出版、1984〉）、本尊とみなすことに否定的な美術史学の見解（高田修・柳澤孝「四柱絵の図像」〈高田修編『醍醐寺五重塔の壁画』吉川弘文館、1959〉）、本尊である彫刻と一体になって両界曼荼羅空間を構成していたと推定する見解（前掲註1拙稿）があり、その宗教的意義が問題となっている。
- ⁸ 『仁和寺史料』寺誌編一（奈良国立文化財研究所史料第三冊、1964）所収。以下、顕證本『仁和寺諸院家記』・『仁和寺諸堂記』は同史料寺誌編一に、『本要記』・『本寺堂院記』は同史料寺誌編二による。
- ⁹ 発掘調査によって、この三重塔では心礎がなかったことも確認された（京都市埋蔵文化財研究所『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』（1997.3））。
- ¹⁰ 長承3年(1134)4月20・30日、同年閏12月6・19日、保延元年(1135)1月17日の条他。
- ¹¹ 顕證本『仁和寺諸院家記』。
- ¹² 1基に大日如来4体と四方四仏各1体、合計8体の仏像彫刻を安置する塔が、永保3年(1083)建立の法勝寺八角九重塔以降、天皇・院周辺で盛んに建立され、待賢門院の御願寺として供養された円勝寺3基の塔のうち、大治2年(1127)供養の五重塔には仏像8体を安置し、これらが六日如来4体と四方四仏各1体であった可能性が高いことは前掲註1拙稿で述べた。保延元年5月に停止された法金剛院での計画も、こうした塔の構想の一環に位置付けられる。
- ¹³ 同記永祿2年(990)3月20日の条に、「太上天皇供養円融寺塔、造五重塔一基、摩訶毘盧遮那如来像四体、図絵於塔中、阿弥陀、釈迦、薬師、弥勒、各一安置於壇上」とある。
- ¹⁴ 同記では「古徳記」を引いて、「同五重塔安置大日如来四体、図絵於塔中弥

陀・釈迦・薬師・弥勒等、永延二年三月廿日供養」とある。

¹⁵ 安祥寺の建築と安置仏の関係は、紺野敏文「創建期の安祥寺と五智如来像」（『美術史』101、1976）、副島弘道「安祥寺五智如来の造立年代と承和以降の作風展開」（『仏教芸術』133、1980）で検討されている。法成寺金堂・講堂については杉山信三「藤原氏の氏寺とその院家」（同『院家建築の研究』吉川弘文館、1981）・清水擴「法成寺伽藍の構成と性格」（同『平安時代仏教建築史の研究』中央公論美術出版、1992）、円教寺御願堂・円宗寺金堂は清水「四門寺の構成と性格」（前掲清水著書）・杉山「仁和寺の院家建築」（前掲杉山著書）・平岡定海「四門寺考」（『論集日本仏教史3』雄山閣出版、1986）、平等院本堂は清水「平等院伽藍の構成と性格」（前掲清水著書）、法勝寺・円勝寺金堂は、清水「六勝寺伽藍の構成と性格」（前掲清水著書）がある。法性寺本堂（10世紀初頭）は毘盧遮那仏を本尊とする（杉山「法性寺から東福寺へ」（前掲杉山著書））が、密教の大日如来の意義をもっていたか明かでない。

¹⁶ これらの彫塑群については、『仁王経念誦儀軌』に基づく仁王経曼荼羅の上位に金剛界五仏をおいたとする説が有力視されている（東寺創建一千二百年記念出版編集委員会編『東寺の歴史と美術 新東宝記』（東京美術、1996）所収、伊藤史郎 講堂彫刻解説）。また、中国成立の梵本金剛頂経に基づく仁王経曼荼羅成立初期の姿とする説（松浦正昭「東寺講堂諸尊と弘法大師の構想」〈『週刊朝日百科 日本の国宝 65 教王護国寺（東寺）1』、1998）もある。

¹⁷ 『密教大辞典』行宴の項を参照。

¹⁸ 中野玄三公刊「東寺金堂講堂灌頂院本尊座位」（同『日本仏教絵画研究』法蔵館、1982。初出は『美術研究』231、1963）による。

¹⁹ 中野玄三「仁王経法と不動明王像」（佐和隆研・濱田隆編『密教美術大観』3、朝日新聞社、1984）。

²⁰ 『東宝記』に、講堂創建当初から存続した東寺講堂の大日如来像についての記述が残り、「中尊大日、智拳印、丈六、歳五仏宝冠『宝冠面並付五仏像、中尊法界定印也、』光中有卅七尊、但最上无大日形像、安宝塔」とある。大日如来に金剛界三十七尊を現す事例として、大伝法院の中尊大日如来（長承元年（1132）供養）、金剛寺金堂の中尊（鎌倉時代前期）、鎌倉再建神護寺講堂の中尊などが知られ（山本勉「足利・光得寺大日如来像と迎宴」〈『東京国立博物館紀要』23、1987））、東寺講堂の大日如来との関係が注目される。こうした事例が、平安時代末から鎌倉時代初期に多くみられる点に注意したい。

²¹ 前掲註16『東寺の歴史と美術 新東宝記』所収、山岸常人 灌頂院建築解説。

²² 前掲註7 濱島論文。現在は塔内部の西に胎蔵界、東に金剛界が配されているが、昭和の解体修理で、心柱置板が後世90度回転されており、もとは南に金剛界、北に胎蔵界という構成であったことが明らかになった。

²³ 藤井恵介「密教と空間」（関口正之編『図説日本の仏教2密教』新潮社、1988）。

²⁴ 藤田経世編『校刊美術史料 寺院編中』（中央公論美術出版、1975）。

²⁵ 上野勝久「平安初期神護寺の伽藍構成とその配置」（『日本建築学会計画系論文報告集』372、1987.2）、同「文覚の造営事績と神護寺の鎌倉初期再建堂塔」（同395、1989.1）。鎌倉時代の神護寺復興も同論文で詳しく論じられる。

²⁶ 「観心寺観勤縁起資財帳」（『大日本仏教全書』寺誌叢書3所収）。

²⁷ 『弘法大師伝全集』10所収。

²⁸ 同記に「北院御記云、仁和寺円堂、為彼門勸願、昌泰二年被遂供養、以円城寺為供仏御導師、万タラ供衆衆五十口、（中略）延喜四年三月、建円堂、安置金剛界会三摩耶形」とある。

²⁹ 『類従三代格』2所収、昌泰3年11月29日の太政官符。

³⁰ 杉山信三「仁和寺の院家建築」（前掲註15『院家建築の研究』）。

³¹ 京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第9冊 仁和寺境内発掘調査報告―御室会館建設に伴う調査―』（1990.6）。

³² 濱田隆『日本の美術 10 曼荼羅』（至文堂、1980）21頁所収の第23図。

³³ 醍醐寺円光院でも「金銅両界曼荼羅」（『醍醐雑事記』1）を安置したというが、これが如何なる形式のものか明かでない。

³⁴ 『類従三代格』2「年分度者事」所収、昌泰3年11月29日の太政官符。

³⁵ 円堂の後壁には十二天と五大尊が描かれていた（『本寺堂院記』裏書）。中野玄三「国宝十二天画像の研究」（前掲註18『日本仏教絵画研究』）では、これら十二天・五大尊像に、天台密教の影響があった可能性が指摘されている。中野氏の指摘通り、仁和寺円堂の創建段階に天台密教の影響があった可能性も考えられる。改められた円堂でも天台系の図像が採用されたことについては、図像の選択と建築空間の構想との関係をふくめ、慎重に議論する必要がある。

³⁶ 『江都管納言願文集』2（『六地蔵寺善本叢刊』3、汲古書院、1984）所収。

³⁷ 小山靖憲「覚鑊と高野山大伝法院」（根来寺文化研究所『根来寺の歴史と美術―興教大師覚鑊と大伝法堂丈六三尊像―』東京美術、1997）。

³⁸ 中野達徳編『興教大師全集』下（1935）所収。なお、「大伝法院本願聖人御伝」（『統群書類従』215）にも「伝法院丈六尊勝安置、遂供養」とある。

³⁹ 前掲註37『根来寺の歴史と美術』所収。

⁴⁰ 「大伝法院本願聖人御伝」には「七間四面御堂」を構想し、「二階宝形楕皮葺」の仏堂を建立したとあり、文化庁蔵「高野山木屏風」（中川委紀子「高野山大伝法院の創建―その景観と仏像・荘厳―」（前掲註37『根来寺の歴史と美術』）90-91頁所収。本屏風中での大伝法院の比定は、中川氏の論考に基づく）

には方五間、宝形造の建築として描かれる。宝形という点では全ての史料で一一致し、求心的な平面形式をとっていた可能性が高い。

⁴¹ 「大伝法院本願聖人御伝」には「中尊金剛界大日如来御身一丈八尺、（中略）中尊鳥羽院別御願、（中略）左脇金剛薩埵者丈六之尊、（中略）右脇尊勝仏頂丈六之尊」とあり、「大伝法院并堺内堂塔本尊仏具等事」とは法量異なる。

⁴² この記述からは、中尊に対しどちらを左右とするか不明であるが、「大伝法院本願聖人御伝」には「後壁中方五仏、東方五菩薩、西方五大尊」とあり、大伝法院でも五仏・五菩薩・五大尊の配置は東寺講堂と同じであったと考えられる。

⁴³ 「大伝法院本願聖人御伝」に「柱絵三十七尊印形被図之」とある。

⁴⁴ この本堂には両界曼荼羅が安置され、「大伝法院并堺内堂塔本尊仏具等事」に「一、金泥両界曼荼羅《各七幅、》胎蔵後壁南天鐵塔龍猛開戸之作法、金剛界後壁釈迦成道儀式図之」、「大伝法院本願聖人御伝」に「両界曼荼羅各々九幅、紺地金泥大曼荼羅尊形、東曼荼羅後壁、南天鐵塔、（中略）西曼荼羅後壁、菩薩樹下成道初夜」とあるように、両界それぞれに後壁があった。藤井恵介「高野山金堂の成立と両界曼荼羅を安置する中世本堂」（同『密教建築空間論』中央公論美術出版、1998）では、両界曼荼羅を安置するための恒常的施設を備えた中世の仏堂形式が真言密教系寺院の中心仏堂として一般的有効性をもっていたと推定されており、大伝法院本堂もこの一例と位置付けられる。文政9年（1826）頃再建された（岡田英男「根来寺の建築」（前掲註37『根来寺の歴史と美術』））現在の大伝法堂では、母屋内の須弥壇前に2本の柱が立つ。長承本堂でも須弥壇前に2本の柱が立ち、金沢文蔵藏永3年（1184）の高野山金堂指図（前掲藤井論文所収）のように、内陣を二分する構成であった可能性が高い。

⁴⁵ 総本山醍醐寺編『根来要旨―覚鑊基礎史料集成―』（東京美術、1994）。

⁴⁶ 両界堂以外でも、仁仁2年（1109）建立の法勝寺北斗曼荼羅堂、長承4年（1135）建立の法金剛院北斗堂では、北斗曼荼羅を構成する計57体の木像の彫塑群から曼荼羅が構成されていたと考えられる（富島義幸「五大堂の形態変化と五壇法の成立―密教空間の展開に関する一考察―」（『建築史学』33、1999.9）。

⁴⁷ 前掲註1拙稿。なお層塔以外では、神護寺法華堂に納められた一重小塔（『神護寺実録帳』）、高野山奥院の空海廟塔（『続弘法大師年譜』）のように、胎蔵界中台八葉院の九尊を安置した事例もある。

⁴⁸ 前掲註1拙稿。層塔では、大日如来と、四方浄土變の釈迦と弥勒の方位を入れ換えた四仏からなる両界曼荼羅空間がいくつも認められる。

⁴⁹ 伊東史朗「真言密教彫像論」（同『新編 名宝日本の美術8 神護寺と室生寺』小学館、1992）。

⁵⁰ 東寺講堂の諸尊の構成のみならず、註20で述べたとおり、同中尊である大日如来像の形式が平安末期から鎌倉初期に再び規範となる点も注目される。

⁵¹ 『叡岳要記』・『山門堂舎記』。総持院多宝塔の形式・安置仏は、清水擴「多宝塔の性格と形態」（前掲註15『平安時代仏教建築史の研究』）、藤井恵介「最澄・円仁と天台密教空間」（前掲註44『密教建築空間論』）で考察されている。西塔に延長2年（924）に建立された多宝塔にも「胎蔵五仏」が安置された（『叡岳要記』）。なお、承徳2年（1098）10月20日供養の祇園感神院御塔（多宝塔）には「五仏」が安置された（『中右記』）。このとき祇園社への天台教団の進出が著しく、この塔の供養導師を天台座主仁覚が勤めており（『殿暦』）、両界曼荼羅諸尊を安置する天台系の塔であった可能性が高い。

⁵² こうした結果に至るのは、天台系寺院の建築に関する史料が、後世に編纂されたものに限定され、真言系寺院に対して史料的に恵まれないことに起因している可能性も考えられる。しかし、両者の国家護持最大の修法を比較すると、真言密教の後七日御修法で両界曼荼羅をもちいるのに対し、天台密教の熾盛光法では両界曼荼羅をもちいないことから、天台密教では真言密教に比べ、両界曼荼羅の浸透が根深くはなかったことが想定される。こうした相違点からは、同じように大日如来を安置しながら、両者で空間構成理念が違っていた可能性も考えられ、注目される。なお、『山門堂舎記』・『叡岳要記』・『三塔諸寺縁起』に両界曼荼羅との関りが想定される比叡山の建築をみていくと、天曆2年（948）建立の大日院があるが、安置仏は不明である。また、比叡山五仏院では、三尺金剛界五仏を丈六阿弥陀とともに安置したことが確認される。この仏堂の中尊は阿弥陀とみなすのが妥当であろうが、現在のところ明確にしない。

⁵³ 前掲註1拙稿。

⁵⁴ 前掲註1拙稿。

⁵⁵ 富島義幸・高橋康夫「法成寺の塔について」（『仏教芸術』228、1996.9）。

⁵⁶ 清水擴「阿弥陀堂の荘嚴とその系譜」（前掲註15『平安時代仏教建築史の研究』。初出は『日本建築学会計画系論文報告集』389、1988.7）。

⁵⁷ 室内に両界堂が設けられるという、鎌倉再建東大寺大仏殿の特異な空間の構成は、藤井恵介「弘安七年東大寺大仏殿図について」（前掲註44『密教建築空間論』）において明かにされたが、その背景はいまだ十分に検討されていない。

(2000年2月10日原稿受理、2000年5月29日採用決定)